

那智山における超感覚的知覚現象

—南方熊楠による記述と『ヒューマン・パーソナリティ』との比較を通じて—

唐澤太輔 (TIEPh 客員研究員)

キーワード：南方熊楠、那智山、フレデリック・マイヤーズ、
Out-of-Body-Experience

はじめに

1900年10月、世界最大の学問都市・ロンドンから帰国した南方熊楠^{みななかたぐす} (1867～1941年)は、すべてに行き詰まっていた。学問、家族関係、そしてお金、すべてにおいて徹底的に挫折し、生きる方向性を失っていた。それは、後に「世界的博物学者」「日本民俗学の母」(ちなみに「父」は柳田國男^{やなぎたくに お} [1875～1962年]と言われることがある)「エコロジー運動の先駆者」そして「日本人の可能性の極限」などと評されることになる知の巨人の、人生最大の危機であった。このような時期に、熊楠は聖地・那智山へと向かった。

熊楠が那智へ向かった理由には、主に二つある。一つは、弟・常楠^{つねぐす} (1870～1954年)が経営していた南方酒造の那智勝浦支店を手伝うためである。酒造りは冬期が特に忙しい。熊楠は、常楠に要請されるような形で、支店の冬期酒造業の応援に行ったのである。しかし、これは、いわば表面上の理由でしかない。いくら肩身の狭い思い¹をしていた熊楠であっても、断ることはできたはずだ。もう一つは、世間からの逃避である。それは現実世界からの逃避と言ってもよいかもしれない。つまり、世人になることへの本能的拒否感^{こもりく}が彼をして隠国・那智へと向かわせたのである。これが本音であろう。そもそも、熊楠の書き残している日記を読む限り、どうもまともに弟の店を手伝っている様子はいかがえないのである。

熊楠は、この地に引き付けられるかのようにやって来て、結局約3年間(途中、和歌山市へ歯の治療に行ったりもしたが)留まることになる。

小生二年来この山間におり、記憶のほか書籍としては『華嚴経』、『源氏物語』、『方丈記』、英文・仏文・伊文の小説ごときもの、随筆ごときもの数冊のほか思想に関するものとはなく、他は植

¹ 経済的理由などにより英国からの帰国を余儀なくされた熊楠は、しばらく和歌山市の弟夫婦の家や亡父の知己の寺院などで世話になっていた。熊楠は、弟夫婦と折が悪かったようだ。莫大な金額をかけた私費留学であったにもかかわらず、「蚊帳^{かや}ごとき洋服一枚[全集7:24]」で帰国した兄を、常楠はどうしても理解できなかったのである。

物学の書のみなり。それゆえ博識がかったことは大いに止むと同時にいろいろの考察が増して来る。いわば糟粕なめ、足のはえた類典ごときは大いに減じて、一事一物に自分の了簡がついて来る。

(土宜法龍宛書簡、1903年6月30日) [全集7:329]

上記は、熊楠が那智へ来てから約2年を経た時に記された書簡である。熊楠が、那智へ持って行ったものは『華厳経』『源氏物語』『方丈記』、あとは小説、随筆、植物に関する書籍だけであった。しかし、実は、熊楠はこの書簡を記した約7ヶ月後、自身の「病態」を認識して行く上でも、欠かせない本を入手することになる。それが *Human Personality and Its Survival of Bodily Death vol.1 & 2* 以下、本稿では *HP* と略記する)であった。また、自身の「病態」を知るためのみならず、熊楠は読了後、民俗学に関する論考執筆のためにも、この本をしばしば参照している²。

*HP*は、1903年2月に英国で発刊された。この書物は、英国心靈現象研究協会(The Society for Psychical Research、通称 SPR³)の重鎮フレデリック・W・H・マイヤーズ(Frederick William Henry Myers⁴、1843～1901年、古典文学者・詩人。「テレパシー telepathy」や「超常 supernormal」な

² マイヤーズ及び「テレパシー telepathy」に関しては、拙稿「南方熊楠と「テレパシー」という言葉に関する考察」(唐澤太輔、『エコ・フィロソフィ研究』第9号、東洋大学、2015年)を参照。

³ SPR(1882年設立)について、日本においては箕作元八(1862～1919年、歴史学者)が、その活動を紹介している。1886年に井上円了(1858～1919年、仏教哲学者・教育家)は、箕作元八、田中館愛橘(1856～1952年、地球物理学者)、坪内逍遙(1859～1935年、小説家・評論家)、三宅雪嶺(1860～1945年、哲学者・評論家)など多岐にわたる研究者たちと共に「不思議研究会」という、まるで SPR と同じ研究会を発足させている。円了が、箕作を通じて SPR を知っていた可能性は高い。箕作は、1885年3月25日発行『東洋学芸雑誌』(第42号、東洋学芸社)で、以下のように SPR について述べている。

英國ニテ昨年創立セル心理研究會ニテ此等ノ事ニ就キテ爲セル研究ノ如キハ嚴ニ其詐誑ヲ防キ終ニ得タル所ノ成績ヲ精密明白ニ記録シタリ…(中略)…同會ノ研究員ハ 察 心 (Thought-reading) 奪 感 (Mesmerism) 妖 怪 (Apparitions) 鬼 屋 (Haunted House) 其外奇怪ニ渉ル事實ヲ研究セシカ就中察心ニ關スル報告ハ實ニ驚クニ堪ヘタリ。

[箕作:33] (下線—唐澤)

箕作は、ここで SPR の研究内容の概要を紹介している。SPR においては、Thought-reading (読心術) や Mesmerism (催眠術)、Apparitions (幽霊・幻)、Hounted House (幽霊屋敷) などが研究されていると述べている。

⁴ SPR の活動やマイヤーズの著作について、日本において極めて初期に言及したのは熊楠であった。熊楠は、SPR を「心理研究会」「幽霊等の会」「不思議会」「ロンドン不思議会」などと呼んでいる。熊楠が、マイヤーズについて初めて言及したのは1903年8月8日付土宜法龍宛書簡においてである(*HP*が英国で発刊されたのは1903年2月)。

今年 Myers という人、一生かかりてかのロンドン不思議会をしらべたる研究の結果として *Human Personality and its Survival of Bodily Death* (人間簡人質とその体の死後の留存) と題し、二冊(上巻は序文四十六頁と本文七百頁、下巻は序文二十頁と本文六百六十頁)の大本出でたり。二十一円ほどするなり。

どを造語した人物でもある)の遺稿をもとに編纂されたものである。構成は、

<vol,1>

I. INTRODUCTION

1 章 序論

II. DISINTEGRATION OF PERSONALITY

2 章 人格の分裂

III. GENIUS

3 章 天才

IV. SLEEP

4 章 睡眠

V. HYPNOTISM

5 章 催眠術

VI. SENSORY AUTOMATISM

6 章 知覚の自動作用

<vol,2>

VII. PHANTASMS OF THE DEAD

7 章 死者の幻影

VIII. MOTOR AUTOMATISM

8 章 筋肉上の自動作用

IX. TRANCE, POSSESSION, AND ECSTASY

9 章 トランス・憑依・エクスタシー

X. EPILOGUE

10 章 結語

の全 10 章から成っている。この大著は 2015 年 12 月現在、まだ和訳されていない。

熊楠は、那智山に孤居していた頃、正確には 1904 年 2 月 12 日に、この書を取り寄せている。届くや否や、熊楠はこの大著を読みふけている。そして、およそ 2 ヶ月かけて読破した。HP 入手後、読了まで、熊楠の日記には「夜臥内にて Myers よむ。」などといった記述が毎日のように見られる。

那智山という聖地独特の「空気」のせいであろうか、HP をあまりにも熱心に読んだせいであろうか、熊楠は、この聖地において、さまざま不思議な経験をしている。

(1903 年 8 月 8 日付土宜法龍宛書簡) [全集 7 : 392]

上記は、熊楠が英国から帰国後の書簡であるが、彼は在英時代から SPR の存在は知っていた。法龍から SPR の調査依頼まで受けている(結局、熊楠は調査を行わなかった[唐澤 2015 参照])。一方、熊楠(1900 年 9 月 1 日、ロンドンから日本へ帰国の途につく)と入れ違いで英国に留学(1900 年 10 月 28 日ロンドン到着)した文豪・夏目漱石(1867~1916 年)も「思い出す事など」(1910~1911 年)で、マイヤーズについて触れている。

死後の生! 名からして既に妙である。我々の個性が我々の死んだ後迄も残る、活動する、機会があれば、地上のひとと言葉をかわす。スピリチズムの研究をもって有名であったマイエルは慥かに斯う信じて居たらしい。其マイエルに自己の著述を捧げたロッジも同じ考へのように思われる。

[夏目 : 407] (下線—唐澤)

現在日本においては、ほとんど知名度のない(忘れ去られたと言っても過言ではない)マイヤーズおよび SPR であるが、熊楠や漱石が生きた時代(明治~昭和初期)にかけては、少なくとも知識人の内では多少の知名度はあったようである。

1, 熊楠による記述から

熊楠は、聖地・那智山で様々な不思議な経験をした。例えば熊楠は、以下のような記述を残している。

1904年3月10日 朝晴、午後雨 蛙連声して鳴はじむ

うつゝにて（幻想といふこと知りながら）黒き紐ある人形如きものとなり、竜動のアンダーグラウンド鉄道の上り路如き所を進み又却退し（進退とも頭は同一方に向ひ）又下におりる一所、家の外に一男一女（日本人）あるを見るをわざと見ず、人形如きものに自分の意志集る。注意点と見ゆ。

[日記2: 413]（下線—唐澤）

熊楠はここで、自分の魂が外に抜け出して、黒い紐のある人形のようなものとなり、ロンドンの地下鉄の登り坂のようなところを進んだと述べている。途中で日本人の男女を見たようだ。しばらくして、再び人形のような肉体に戻ってきたようである。非常に分かりづらい文章だが、要するに、自分の肉体がまるで人形のようになり、そこから黒い紐につながれた自分の頭が抜け出したということであろう。熊楠は、同じような事柄を翌月にも経験している。

1904年4月25日 雨、夜大風雨

夜大風雨、予、灯を消して後魂遊す。此前もありしが、壁を透らず、ふすま、障子等開き得る所を通る故に迂廻なり。枕本のふすまのあなた辺迄引返し逡巡中、急に自分の頭と覚き所へひき入る。恰も vorticella が螺旋状に延し後急に驚きひき縮る如し。飛頭蛭のこと多少かゝることより出しならん。

[日記2: 431]（下線—唐澤）

熊楠は、ここで「此前もありしが」と述べているが、これは前述(3月10日)の事柄であろう。前述の文章とは異なり、この文章は幾分わかりやすい。またここで熊楠は、明らかに「魂遊す」と記している。熊楠は、自分の頭が ^{ひとうばん}飛頭蛭 のように、あるいは vorticella (ツリガネムシ：絨毛虫門少膜綱絨毛目の1属。体は逆釣鐘形と柄からなる。種々の刺激に応じて収縮し、柄は螺旋状に巻かれる) のように、螺旋状に伸び、辺りを逡巡した後、縮まり、最終的にもとに戻ったという。

つまり、熊楠は「体外離脱(Out-of-Body-Experience, OBE)」を経験していたのである。熊楠は、この時の事柄がよほど印象に残ったのであろう。2ヶ月後に、友人の真言僧・^{どぎほうりゅう}土宜法龍 (1855～1923年)に宛てた書簡の中でも、述べている。

人死して続くものあり。予も柔術などにて気絶し、久しくてクワツを入れられ蘇りしことあり。其状を聞合すに大抵自分のと同じ。川原如き所を歩み、悠々自適、何の気もなく小歌でも出そうなるに、後よりはるかに人よぶと思ひ漸く気づく也。尤も川原を歩しことなき人には其思ひ無きも知れず。然し所感大体は同じ事と予は思ふなり。又魂遊といふことあり、予も今春已に之をなせり。糸にて自己の頭をつなぎ、俗にいふろくろくび如くに、室の外に遊び、其現状を見るなり。此事亦寒甚き山中等にて、かゝるものゝ説を聞合すに、みな同一なり。

(1904年6月21日付土宜法龍宛書簡)[南方：66]（下線—唐澤）

ここでは、上述した二つの日記の記事を合わせたようなものになっている。つまり「糸」＝黒き紐(1904年3月10日)で体と頭をつないで、「ろくろくび」＝飛頭蛮(1904年4月25日)のように部屋の外を飛び回ったと述べている。

さらに、1911年8月「睡眠中に靈魂抜け出づとの迷信(1)」の中で、熊楠は、この那智山にこもっていたときの経験を、以下のように述べている。

七年前厳冬に、予、那智山に孤居し、空腹で臥したるに、終夜自分の頭抜け出で家の横側なる牛部屋の辺を飛び廻り、ありありと闇夜中にその状況をくわしく視る。みずからその精神変態にあるを知るといえども、繰り返し繰り返しかくのごとくなるを禁じえざりし。その後 Frederic W. H. Myers, ‘Human Personality,’ 1903, vol. ii, pp.193, 322 を読んで、世にかかる例尠なからぬを知れり。

(1911年8月「睡眠中に靈魂抜け出づとの迷信(1)」『人類学雑誌』27巻5号)[全集2：260]（下線—唐澤）

熊楠による不可思議な現象の記述においては、しばしば、日記→書簡→論考の順で、具体性が増し、さらに大仰になる傾向が見られる⁵。この OBE もその例外ではないかもしれないが、最も大事な点

⁵ 例えば、那智隠栖期の熊楠によるナギランの「やりあて(偶然の域を超えた発見や発明・的中、熊楠の造語)」における記述には、それがよく表れている。「日記」という極めて個人的記録においては、「ふとした思いつき」で発見したとなっており、客観的に大勢の眼に触れる「論考」においては、「幽霊が示してくれた」ことになっている。そして「日記」ほど、個人的ではなく、「論考」ほど、大勢の眼に触れることもないであろう「書簡」においては、「夢によって発見した」ことになっている。「日記」＝ふとした思いつきによる発見、「書簡」＝夢による発見、「論考」＝(亡き父の)幽霊による発見となっているのだ。つまり、「日記」→「書簡」→「論考」の順に、「発見」のプロセスがよりドラマチックになっているのである。ちなみに発見したナギランの本数は、日記では20本、書簡では14本(土宜宛書簡)及び20本(小畔四郎宛書簡)、論考では40本(1911年6月10日～18日「千里眼」『和歌山新報』))となっている。[唐澤2014参照]

は、熊楠の言説の虚偽を明らかにするのではなく、彼がその事象に並々ならぬ関心を抱いていた背景を知ることである。

この熊楠による OBE は、しばしば彼に関する小説や漫画で取り上げられている。熊楠の 那智 隠 栖 期^{なちいんせいき}は、この出来事なくしては語れないほどになっている感がある。それほど、この出来事は後世の我々にとって興味深いものでもある。那智隠栖期のクライマックスと言っても過言ではない。

2, *Human Personality and its Survival of Bodily Death* における記述から

熊楠は、上述した「睡眠中に靈魂抜け出づとの迷信(1)」の中で、自分の経験した OBE のような出来事を「Frederic W. H. Myers, ‘Human Personality,’ 1903, vol. ii, pp.193, 322」で読んだことがあると書いている。しかし、これではあまりにも読み手に対して不親切である。そこに何が書かれているのか、当時の日本の一般読者には皆目検討もつかなかったであろう。

上記の論考で示されている *HP* において、熊楠が参照した箇所 (vol.2 の 193 頁と 322 頁) の内容は、以下の通りである。

CAPTER IX, TRANCE, POSSESSION, ECSTASY, p.193

The next main subject which fell under our description was *sleep*. And this state—the normal state which most resembles trance—has long ago suggested the question which first hints at the possibility of ecstasy, namely, What becomes of the soul during sleep? I think that our evidence has shown that sometimes during apparent ordinary sleep the spirit may travel away from the body, and may bring back a memory, more or less confused, of what it has seen in this clairvoyant excursion. This may indeed happen for brief flashes during waking moments also. But ordinary sleep seems to help the process; and deeper states of sleep—spontaneous or induced—seem still further to facilitate it. In the coma preceding death, or during that “suspended animation” which is sometimes taken for death, this travelling faculty has seemed to reach its highest point.

9 章 トランス、憑依、エクスタシー 193 頁

我々が次に説明する話題は「眠り」についてであった。そしてこの状態（最もトランス状態に似ている常態）は、古来、エクスタシーの可能性で最初に浮かぶ疑問、つまり睡眠中、魂に何が起るのかという疑問を示唆してきた。我々のもっている証言は、時に明らかに普通の眠りの間、魂は肉体から出回るのではないか、そして多少混乱しつつもこの千里眼的〔体外〕離脱において見たことの記憶を持ち帰っているのではないか、ということを示すと思われる。これは、起

きている間にも、突発的なものとして、確かに起こり得るものであろう。しかし、通常の眠りは、このプロセスを助けるようである。そして、(自発的であれ誘導的であれ) より深い眠りは、さらにそれを助長するようである。死に先立つ昏睡において、あるいは時に死と見なされる「仮死状態」において、この〔魂の〕出回りの能力〔＝体外離脱〕は、その頂点に達するようである。

(和訳・〔 〕内・下線―唐澤)

マイヤーズは、ここで、深い眠りあるいは昏睡状態、仮死状態などにおいて、「離魂」あるいは「体外離脱」が起こり得るということ、そして、時にその際の、つまり体外離脱し徘徊して見た際の光景を記憶したまま覚醒することがあると述べている。

322 頁の前数頁には、このように臨死状態から、辺りの光景を克明に記憶し蘇生した人の話が、載せられている。そして、それを踏まえて、マイヤーズは以下の事例を挙げている。

APPENDICES, TO CHAPTER VII, p.322

A case similar in many respects to the one just quoted is that of the Rev. L. Bertrand, given in Proceedings S.P.R., vol. viii. p.194. During a dangerous ascent of the Titlis, Mr. Bertrand separated from his companions, sat down to rest, and became paralysed by the cold. His head, however, remained clear, and he experienced the sensation described by Dr. Wiltse of passing out of his body and remaining attached to it by “a kind of elastic string.” While in this condition, he had clairvoyant impressions about his absent companions, and much astonished them on their return by describing their doings to them.

7 章への付録 322 頁

ちょうど引用されたものと多くの点で類似したケースは、S.P.R.紀要 8 号の 194 頁にあげられた、L.バートランド師のものである。ティトリス山の危険な登山の間に、バートランド氏は、彼の仲間たちとはぐれてしまった。そして休むために座り、寒さのために麻痺し動けなかった。しかし、彼の頭は、クリアなままで、ウィルツ博士によって説明された、体外離脱そして「伸縮自在のひものようなもの」によってくっつけられている感覚を経験したのである。この状態の間、彼は、はぐれた仲間たちに関する千里眼的印象をもち、彼らが戻ってきた際に、彼らが行っていたことを述べて非常に驚かせた。

(和訳・〔 〕内・下線―唐澤)

ティトリス山とは、中央スイスにそびえる山である。バートランドはそこで、「体外離脱」を経験した。a kind of elastic string (伸縮自在のひものようなもの) とは、熊楠の経験した「黒い紐」と類似している(前述した日記「1904 年 3 月 10 日」を参照のこと)。先述の通り熊楠も、同じように紐の

ようなものにつながれて「体外離脱」し、辺りの様子を見てきている。熊楠が HP のこの文章を読んだ後、「体外離脱」を経験したのか、読む前に経験したのかは、今のところ不明である。

このような山の中での孤独感、いわゆる「孤立性幻覚状態」を助長させる。また、「深夜にいたれば、そのうえに感覚遮断が加わるので、健康な人間でも幻覚準備状態におちいる」[近藤：146] こともあるという⁶。熊楠は肉体的には、その生涯において特に大きな病気にも罹らず「健康な人間」だったようだが、精神的にも「健康な人間」だったかという、次章で見るように、そこには疑問符が打たれる。

3, 側頭葉てんかんと関連

熊楠の脳髄は、彼のたつての希望で死後解剖され、現在、大阪大学医学部に保存されている。脳の重さは 1425 グラムであった。成人の平均 (1300~1400 グラム) より少し重い程度である。しかし、のうこう脳溝は非常に深く刻まれていた。さらに、近年の研究によって、熊楠が、側頭葉てんかんであったことが明らかにされている。保存脳の解析・てんかん症候学の第一人者である 扇谷 明 (せんごくあきら せんごくクリニク院長) が、3 次元 MRI を用いて、熊楠の脳髄を詳細に検査したところ、右海馬の萎縮が見られたという⁷。

そして近年、この側頭葉てんかんと「体外離脱(OBE)」に深い関係があることがわかってきている。科学雑誌 *Nature* の 2002 年 9 月 19 日号には、‘Stimulating illusory own-body perceptions—The part of the brain that can induce out-of-body experiences has been located. 「幻影的な自己身体認識への刺激—体外離脱体験へと誘導することができる脳の一部を特定—」’と題された、大変興味深い記事が掲載されている [Blanke : 269]。実験において、右側頭葉てんかんの患者 (43 歳女性) に対して、ミリアンベア 大脳皮質の右側に電気刺激を与えたところ、体外離脱感覚が生じたのである。最初、2~3 mA で刺激したところ、患者にはまず “sinking into the bed (ベッドに沈んでいく)” あるいは “falling from a height (高いところから落ちている)” という感覚が生じた。そして、刺激を 3.5mA に上げる

⁶ 熊楠は、那智隠栖期ではないが、ある冬、日高郡妹尾官林 (和歌山県日高郡美山村にある妹尾国有林) に採集旅行を敢行した際、孤独と寒さにより、ありありと幻覚を見たことがあった。

さる昭和三年十二月三十一日夜、予、日高郡妹尾にあって、大雨中に十八町ばかり山中を歩むうち、深谷に臨んだ道側の雑木が、たちまちことごとく満開せる梅林と化け、一天微雲だになく月さえ渡った。しばらく歩を駐めて観れば、依然として大雨中にあり。歩み出すとまた月夜の梅林が現じた。

(1935 年 1 月「蓮の花開く音を聴くこと」『ドルメン 4 巻 1 号』) [全集 5 : 100] (下線—唐澤)

⁷ 扇谷による、熊楠の側頭葉てんかんについての詳細は、以下を参照。

1) Murai T, Hanakawa T, Sengoku A et al. ‘Temporal lobe epilepsy in a genius of natural history: MRI volumetric study of postmortem brain’. *Neurology*; 50: 1373-1376, 1998.

2) 扇谷明「南方熊楠のてんかん：病跡学的研究」、『精神神経学雑誌』、第 108 巻第 2 号、2006 年

と、患者は、「I see myself lying in bed, from above, but I only see my legs and lower trunk(上から、ベッドに自分が横たわっているのが見える。しかし、両足と下半身しか見えない)」と答えた。つまり、右側頭葉てんかんにおいて、脳の右側のある部分に刺激が与えられた場合、OBE が起こりうるということが、実験で証明されたのである。

注目すべきは、OBE において、被験者が「両足と下半身しか見えない」と述べている点である。熊楠は、1904 年に自分の首が抜け出るという経験を 2 回している。自分の首が抜け出ているのだから、当然、横たわっている自分の頭は見えないわけである。もしかしたら、熊楠はこのとき、自身の「両足と下半身」しか見えていなかったのかもしれない。

熊楠は 18 歳の時に初めて、自身のてんかん発作について記述している。その後、意識を失う「大発作」も 3 回ほど経験している。しかし、彼が 30 代に入ってから、このような明かな(誰の目から見てもわかる)発作は見られなくなる。しかし、意識減損や自動症を伴ういわゆる「複雑部分発作」や、意識減損に至らない「てんかん性前兆」(単純部分発作などとも言われる)に関する記載は、多数見受けられる。これらは、熊楠が生きていた当時は、てんかん発作とは考えられていなかった。そして、留意すべき事柄は、後者(てんかん性前兆)においては「既視体験(déjà-vu デジャ・ビュ)」や、以前にあったと感じるだけではなく、すぐ次に起こることがわかると感じる「予知的感覚」が頻繁に見られるという点である。

実は、熊楠自身は、このような現象を、*promnesia*(プロムネシア)という専門用語で記述している。彼は、おそらくこの語について、*HP*で知ったものと思われる。熊楠が、初めて *promnesia* という言葉を用いるのは、1904 年 3 月 24 日付土宜法龍宛書簡においてである。日記からもわかるのだが、この頃、熊楠は *HP*を毎夜のように読んでいた。

今始めて貴下より承ることも(たとえば『仏祖通載』の文、今度小生望むところ、これは小生は未見のものなり。しかして『付法蔵伝』中の某尊者のことにあらず。他のこととして)、承りおわりてこんなことはどこかで聞いたことがあると思うなり。これはプロムネシア(*promnesia*
ぜん ち びゅう
前知謬)と申し、今始めて知ることを以前から知っておったことと間違える一種の謬病なり。小生などには多し。

(1904 年 3 月 24 日付土宜法龍宛書簡)[全集 7: 461] (下線—唐澤)

熊楠は、自分に、この *promnesia*(前知謬)が多いことを自覚していた。*HP*の vol.1 には、*promnesia* について、以下のように記載されている。

GLOSSARY p.xx

Promnesia.—The paradoxical sensation of recollecting a scene which is only now occurring for the first time; the sense of the *déjà-vu*. The term *paramnesia*, which is something given

to this sensation, should, I think, cover *all* forms of erroneous memory, and cannot without confusion be used to express specifically this one anomalous sensation.

用語集 xx 頁

プロムネシア——たった今、初めて起こっている場面を回想するというパラドキシカルな感覚。つまり「デジャ・ビュ」の感覚。「パラムネシア(記憶違い)」という語は、この感覚に賦与されるもので、誤った記憶のすべての形式をカバーするであろうが、混乱なしに特にこの一異常感覚を表現するために使うことはできないと思われる。

(傍点・下線・和訳—唐澤)

さらに、熊楠は、以下のようにも述べている。

もつとも四巻四号二三八頁十二行以下を見れば、古谷君は最初より『続漢書』と『後漢書』の別物たるを心付きおられたるごとくなるも、心理学にいわゆるプロムネシアとて、何人も多少、今初めて聞きたることをこれに似たることと混じて、おのれ以前より知りおりたるごとく想う傾きあり。予自身ごとき、四十歳を超えてよりこの病おびただしく、よって毎事自記手筆し置かざることは、たとひ従来知り切ったることといえども^{たの}憑むべき証拠とせぬ定めなり。

(未発表手稿「古谷氏の謝意に答え三たび火斎珠について述べ(上)」)[全集 6 : 472]

(下線—唐澤)

熊楠は、上記で「この病」と言うように、*promnesia* を「病」であるとしている(前述の 1903 年 3 月 24 日付土宜法龍宛書簡では「謬病」と言っている)。そして、上記では、この独特の既視感を防ぐためにも、熊楠は、必ずいつも自筆でノートを残していることを述べている。

てんかん患者には、既視体験以外にも、例えば「視覚発作」が見られることがあるが、熊楠による、以下に示すような、光が見えるという体験は、彼がてんかん性の視覚発作を起こしていた可能性を指摘できるものである。

1904 年 3 月 21 日 快 寒風 春分

此暁予眼さむること二度、ふとんかぶりあるに眼の前明るし。それにあるものを見るに見えず、又ふとんのしわ等のかげもなし。明きこと水銀の如し。

[日記 2 : 417]

上記は、熊楠がちょうど那智山で *HP* を読みふけていた頃の記述である。熊楠は、夜、布団を被り真っ暗にしているはずなのに、目の前が「水銀」のように明るかったと述べている。神経科学で「内

部視覚(エントプティック)」と呼ばれる現象がある。光の射さない暗闇にいると「視神経がみずから励起状態に入って、あたかも目の中から光が外に放出されてくるかのような、あざやかな光の体験がもたらされる」[中沢：183]というものである⁸。

この他にも熊楠は、以下のような光が見える体験をしている。

『金瓶梅』は大部のもので、西門慶が女の後庭を犯すところ、小生の記憶するだけで、李瓶児、王六児（この女は後を犯さるるを好みしと作りある）、潘金蓮三人あり。どの巻にあるか、ちょっと見出し得ず候。二円か三円で買い得るものゆえ、買い入れて調べられたく候。小生眼わるく、左の眼に蝙蝠ごととき黒き翳点を生じ、久しく書を見ることならず。やや久しく見ると、水銀を斜めに注下するとき幻像を生じ、電光ごとく閃くなり。故にこれだけ申し上げおき候。

(1938年6月23日付岩田準一宛書簡)[全集9：299]（下線—唐澤）

熊楠は、コウモリのような黒い斑点が目に見え、そして「水銀」を斜めに垂らしたときのような、また電光のようにまぶしく光る幻像が見えたという。これは「閃輝暗点^{せんきあんてん}」のようにも思われる。「閃輝暗点」は、片頭痛の前兆現象としてよく現れる。それは突然視界の中心辺りにチカチカと輝く光や稲妻のような光が現れ、目の前が見えづらくなる現象である。色は、さまざまのようである。熊楠によると、自分のそれは「水銀」のようなまぶしい色だったという。ここで、熊楠が「左の眼に……」と記述している点には、注目すべきであろう。左目の機能は、右脳が掌っている。熊楠の脳に右海馬の萎縮が見られたことは先述した通りであるが、それがこの左目に始まる「閃輝暗点」現象の何らかの原因であった可能性も指摘できる。

4. 予知と前知謬

熊楠は、日記において、*HP*の内容に言しばしば言及している。1904年3月31日には以下の内容の事柄が記されている。2月12日に同書を手に入れてから、1ヶ月以上経ってから書かれたものである。

⁸ 「光が見える」体験は、いわゆる「イニシエーション」でよく見られる。「古代チベットでは「真理の道」に踏み込んでいこうと決意した新参者は、いきなりまったく光りの射さない暗黒の部屋に閉じこめられて、そのまま数日間放置される」[中沢：183]という。このような儀礼の痕跡は、「今日のボン教やニンマ派仏教の伝統の中にも、きちんとした修行システムとして残されている」[中沢：183]。さらに「光のまったく射さない部屋の中に数日いると、不思議なことに目の前にさまざまな光のイメージがあらわれてくるようになる」[中沢：183]という。

1904年3月31日

Myers, II, sec 878, precognition は今のサイエンスには分らず。諸事一切一同における。人の精神は順を追ねば分らずとすれば、此理は分る也。

[日記 2 : 421]

HP, vol.2 の 878 節 (8 章) には、以下のような文章がある。

CHAPTER VIII, MOTOR AUTOMATISM, p.185

Along with these powers, which, on the hypothesis of the soul's independent existence, are at least within our range of analogical conception, we have noted also a precognitive capacity of a type which no fact as yet known to science will help us to explain.

8 章 筋肉上の自動作用 185 頁

これらの力すなわち魂の独立存在の仮説が少なくとも我々の類推概念の範囲内にあることとともに、我々はまた、まだ科学に知られていない事実は、予知能力の一形態を説明する手助けになるであろうことを指摘しておく。

(和訳・下線一唐澤)

つまり予知能力 (precognitvie capacity) は、まだ科学でも分からないということである。

precognition とは、いわゆる「予知」のことである。ちなみに熊楠は、これを「知未来」と訳している (1904 年 6 月 21 日付土宜法龍宛書簡) [南方 : 68]。HP の用語集には以下のようにある。

GLOSSARY p.xx

Precognition.—A knowledge of impending events supernormally acquired.

用語集 xx 頁

プレコグニション——超常的に得られる間近に迫った出来事に関する知識。

(和訳一唐澤)

熊楠は、自身にこの「知未来」＝予知能力あるいは神通力があることを明らかに感じていた。例えば、それは以下の様な記述からもわかる。

拝復 二十四日出御はがきは二十六日朝九時拝見、多用の為め只今御受け申上候。御依頼の件は熊公〔熊楠のこと〕神通力を發揮し予知のこととて、丁度二十五日の夜一短文を認め（一寸法師

といふ題)、二十六日早朝(御はがき拝受より三時間ほど前に)柴田泰助氏迄差出しおき候間御掲載を乞ふなり。

(1926年4月28日付三田村玄龍宛書簡)[南方・三田村:205]([]内・下線—唐澤)

熊楠は、この書簡において、自分は神通力を発揮し、三田村玄龍(鳶魚^{えんぎょ}、江戸風俗研究家、随筆家、1870~1952)から依頼が来る前に、既にある文章(「一寸法師[正式には「一寸法師と打出の小槌^{しょうきよく}」]」という題名)を書き終えて、『彗星』という雑誌の編集者(柴田泰助[宵曲^{しょうきよく}、歌人、俳人、随筆家、1897~1966年])へ送ったと言うのである。⁹

他には、以下のようなものがある。

黒井という人は偏狭な人にて女ぎらいの由、そのことを三村氏より申し来たらぬうちに小生神通力にてこれを知り、岩田梅や北条氏輝の妻の咄^{はなし}その他、女のことずくめに致し申し候。(太字—唐澤)

(1926年11月9日付上松菰宛書簡)[別巻1:131](下線—唐澤)

熊楠は、『集古』という雑誌に掲載された黒井という人物が書いた文章の誤りや疑問点を指摘した。そのことがきっかけで、黒井は大変腹を立て熊楠に食いかかってきたようだ。熊楠はそれに応じるように、今度は「女のことずくめ」の文章を書いて、黒井をやり込めようとしたようだ。なぜなら黒井は「女ぎらい」だったからである。三村とは、この雑誌の編集者であるが、熊楠は、この編集者から「黒井は偏狭」で「女ぎらい」であることを聞く前に、既にそのことを神通力で知り、文章を書いたというのである。

ここで示したのはほんの一部で、彼はこのような出来事を頻繁に経験している。そして熊楠は、このような事柄を、特に「tact(適否を見極める鋭い感覚)」による「やりあて」である、と独自に解釈していた[唐澤2014参照]。彼にとっては、ある種「当たり前」の出来事のように頻繁に起きていたこの「予知」あるいは「やりあて」は、実は、現在の科学ではよくわかっていない。このことに熊楠は驚きが隠せなかった。だからこそ、日記に「precognitionは今のサイエンスには分らず」などと記したのである。また熊楠は、「やりあて」ることができ、しかも「科学者」である自分であれば、何とか説明ができると考えていたのかもしれない。事実、土宜法龍や、柳田國男に、この「tact」や「や

⁹ 確かに、1926年4月24日には、三田村から、以下のようなはがきが熊楠に送られている。

此程例の連中にて『彗星』相始め、春陽堂より呈覧仕候筈に御坐候。右、上載致度候間、高文一篇御与成被下度御願申上候。願用まで。

(1926年4月24日付南方熊楠宛書簡)[南方・三田村:205]

三田村は上記で、この度『彗星』という雑誌を始めたので、文章を書いてくれないかと熊楠に依頼をしている。

りあて」について、書簡で説明を試みている¹⁰。しかし、土宜も柳田も、その返信において、熊楠による「tact」や「やりあて」について触れることはなかった。熊楠からこれらを説明された土宜と柳田は、果たしてどう受けとめていたのかは不明である。

熊楠は、自身に予知的な力のようなものがあることを信じていた。しかし、*HP*等を読むことによって、熊楠はどうやらこの「tact」による「やりあて」、つまり「予知 precognition」は、前述した「前知謬 promnesia」ではないかとも、自分自身を疑っていたようである。つまり、初めての出来事なのに、これを予め知っていた（予知）していたと、勘違いしているのかもしれないと疑っていたのである。一方で、やはり自分には予知能力があるということも、完全には否定しきれなかった。「予知」なのか「前知謬」なのか、はっきりさせるためにも、彼は毎日、自身に起こる日々の出来事を日記にこまめに記録していたのだ。

¹⁰ 例えば、土宜法龍には、以下のように述べている。

故にこの tact（何と訳してよいかわからず。石きりやが長く仕事するときは、話しながら臼の目を正しく実用あるようにきるごとし。コンパスで斗り、筋ひいてきったりとて実用に立たぬものできる。熟練と訳せる人あり。しかし、それでは多年ついやせし、またはなはだ精力を勞せし意に聞こゆ。実は「やりあて」（やりあてるの名詞とでも言つてよい）ということは、口筆にて伝えようにも、自分もそのことを知らぬゆえ（気がつかぬ）、何とも伝うることならぬなり。されども、伝うることならぬから、そのことなしとも、そのこと用なしともいいがたし。…（中略）…発見ということは、予期よりもやりあての方が多くなり。やりあて多くを一切概括して運という）。

（1903年7月18日付土宜法龍宛書簡）[全集7：367]（下線—唐澤）

熊楠が上記で述べている「予期」とは、数量（データ）に基づく「予期（予測）」である。ふとした瞬間にひらめく「予知 precognition」のことではない。ふとした瞬間にひらめき、何かを的中させることが「やりあて」である。つまり上記において熊楠は、発見とは、データに基づく「予期」よりも、ふとした「予知」によるものの方が多いと述べているのである。また熊楠は、「やりあて」はあるが、それを明示化して伝えることは大変難しいとも述べている。

柳田國男に対しては、以下のように述べている。

科学科学というが、香、味等を熱度や重力のごとく測定する方はまだまだなし。故に、香道や割烹には日本の方が西洋にまされること多し。画の具を合わずに、師匠と同じ分量を精細に計算して和合しても、師匠ほどの彩色は出ず。世間のこと数量や理屈のみで行けぬこと多し。…（中略）…されば数量の学識、万物に及ぼさぬ今日は tact（何と訳するか知れぬが、練熟能ともいうべきか、石切り屋がよそむきて話しながら臼の目を規則通りに角度正しく切り、何の音調の定則も譜表も持たざる芸妓が隣人のくだまく声に合わせて三線を鼓するがごときを tact という）ということ、もっとも肝心なり。東洋のことには tact まことに多し、西洋人にはこのこと少なし。

（1911年10月25日付柳田國男宛書簡）[全集8：220]（下線—唐澤）

「tact」は数量で表すことはできず、近代科学による方法だけでは、それを真に知ることはできない。しかし熊楠は、この「tact」を知ることこそ最も重要だと言う。また熊楠は、東洋にはこの「tact」に関する事柄が非常に多いという。多いというより、西洋人より東洋人の方が、古来「tact」に関心を示してきたというべきかも知れない。熊楠は、この「tact」を研究することは、当時世界を席卷しようとしていた西洋の近代科学に対抗するための手段の一つになると考えていたのかもしれない。

プロムネシアとて、今始めて見聞することを、世には似たことの多きより、かつてすでに自分が知っていたように思う、一種の錯誤等多ければ、事の起こらぬうちに 夢なり靈感なり確かに筆記し置かずして、事起こりし後の吹聴のみでは、研究すべき価値なからん。

(1911 年 6 月 10 日～18 日「千里眼」『和歌山新報』)[全集 6 : 12]

自分では何かを「予知」し、的中させたと思っていても、それは以前から知っていたのに、そのことを忘れてしまっていて、何かの拍子に思い出しただけのことかもしれない。そうであれば、それは「予知」でも「千里眼」でも何でもない。ただ忘れていたことを思い出しただけである。そんな間違いをしないように、つまり事が起こる前に日頃から何でも記述・記録しておくべきだ、と熊楠はここで述べている。

熊楠の日記は、過剰なまでに詳細である。彼は、日頃の経験（昨晚見た夢、どんな本を読んだか、誰に書簡を書いたか、何時何分に起床し、何時何分に就寝したかまで）を記録し、抜書（ロンドン抜書 52 冊、田辺抜書 61 冊など）によって知の蓄積を残していた。だからこそ、例えば彼の「やりあて」など、いわば超心理学的現象は後世になっても、我々は研究できるのである。事実、例えば熊楠による植物などの「発見」（やりあて）の経緯の^{そご}齟齬（発見場所や採集本数など）は現在、日記・書簡・論考を比較することで明らかになっている。

ただ、ここで注意しなければならないのは、この齟齬を見出すことだけに躍起になってはならないことである。熊楠が、なぜこのような「予知」などに関心を持ち、どのようにそこに意味を見出していたのかを知ること、簡単に言えば、彼の心理的背景を知ることこそ、人間・南方熊楠を理解する上で最も重要なことなのである。

おわりに

熊楠による 1904 年 3 月 27 日の日記には、以下のようにある。

1904 年 3 月 27 日 陰

II, p.262, l.3 from below

虫の物を見るが如し。面前の処のみ見る。

過たるは過去、未来は未見なり。然し何れも実^{じつ}に現にあるなり。

死者現世の成行を知るは、死者の瞬間現世の人の数時に当る也。

(Myers, II, p.57) み合すべし。

[日記 2 : 419]（下線—唐澤）

マイヤーズは、熊楠の示す *HP* vol.2 の 262 頁で、“men’s minds must needs have a certain openness to other mysterious transmission (人の心は不可思議な他の伝達 [ex. テレパシー] に対してある種の寛容さをもたねばならない)” とし、更に、我々人間は “must be ready to conceive other invisible environments or co-existences (他の目に見えない環境や同時に存在する事柄を理解する準備が必要)” であることを述べている。続いてマイヤーズは “remembering the Past (「過去」の回想)”、“inferring the future (未来の推測)” についての見解を述べた後、現在 (の科学など) においては一般的に受け容れられていない (歓迎されていない) 「未来」に対する考え方について、以下のように述べている。

CAPTER IX, TRANCE, POSSESSION, ECSTASY, p.262

Still more unwelcome is the further view that the so-called Future actually already exists; and that apparent time-progression is a subjective human sensation, and not inherent in the universe as that exists in an Infinite Mind.

9 章 トランス、憑依、エクスタシー 262 頁

いまだに受け入れられていないのは、いわゆる「未来」が実際に既に存在しているという更に進んだ考えである。つまり、見かけの時間進行は、主観的な人間の感覚であり、「無限の精神」に存在するように宇宙には内在しているのではない、ということである。

(和訳一唐澤)

熊楠は、*HP* の上記箇所を読み、「過たるは過去、未来は未見なり。然し何れも実に現にあるなり」と書き記している。つまり、我々人間は通常、現在というものを、過去→現在→未来という「時間の矢」の中でのみ考えているが、実は、過去も未来も既にここにあるということである。虫は、今この瞬間に張り付き生きている。そしてこの虫の見方は、「面前の処のみ見」ているようでいて、実は、この「面前」には過去も未来も孕まれているということを熊楠は述べているのだ。熊楠は、この過去も未来も混合された「現在」にこそ、圧倒的に共感したのだと思われる。

ちなみに、熊楠が「(Myers, II, p.57) み合わすべし」としている箇所は、*HP* vol.2 の 7 章 PHANTASMS OF THE DEAD (死者の幻影) で、ここでは、ある人が昔の親友の姿を窓辺に見たあと、新聞を開くとその人の死亡記事が載っていたという話が記されている。この箇所を読み、熊楠は、我々人間による一般的な時間感覚は絶対的なものではなく、「死者の瞬間現世の人の数時に当る」ように、生者とは異なる死者の時間感覚もありうることをメモしているのである。

※

熊楠にとって、過去と未来とは、区別が付きづらいものであった。彼の中では、過去に知っていた

ことと未来に起こる出来事が混合されていた。「予知 precognition」と「前知 promnesia」とがミックスされていた。両者の壁は浸透性をもっていたのだ。熊楠は、ミックスされた「現在」を生きていたのである。世間一般では、過去→現在→未来という見方が正しいとされているが、熊楠にとって、それは「不自然」でしかなく、むしろマイヤーズの言う“the further view that the so-called Future actually already exists(いわゆる「未来」が実際に既に存在しているという更に進んだ考え)”の方が「当然」であった。だからこそ、彼は上記のようなコメントを日記に残したのだ。

過去と未来、これらの区別が曖昧になっていた原因を、熊楠の脳の器質的問題（側頭葉てんかん）にだけ求めることは、本稿における筆者の本意ではない。また OBE をただの幻覚現象として片付けるつもりもない。確かに、熊楠によるこれらの不可思議な出来事の要因が「病」にあることは間違いない。しかし、それがすべてではない。そこには、*Human Personality and Its Survival of Bodily Death* という書物の影響、そして、那智山という聖地に漂う独特の「空気」の影響も多大にあったことを忘れてはならない。また、そもそも、なぜ我々は、自己と他者との区別や3次元的な見方、そして過去→現在→未来という「時間の矢」をもつことが「正常」だと思い込んでいるのかを、深く考えなければならない。このような区別や見方、考え方など消えてしまい、すべてが統一された根源的な場があることを知らねばならない。熊楠による那智隠栖期の超常現象的体験を単なるオカルトと断言してはならない。彼の体験を熟考することは、我々に、生物としての根本的な在り方を考えるきっかけを与えてくれるものである。

以上

本研究は、日本学術振興会科研費若手 B「フレデリック・ヘンリー・マイヤーズの研究—南方熊楠と関連させて—」による。

凡例

1、『南方熊楠全集』は、『全集』と略記した。

『全集』＝南方熊楠著／岩村忍・入矢義高・岡本清造監修、飯倉照平校訂、『南方熊楠全集 1～10 巻、別巻 1、2』、平凡社、1971～1975 年

2、『南方熊楠日記』は、『日記』と略記した。

『日記』＝南方熊楠著／長谷川興蔵校訂、『南方熊楠日記 1～4 巻』、八坂書房、1987～1989 年

参考文献

・唐澤太輔、「南方熊楠と「テレパシー」という言葉に関する考察」、『エコ・フィロソフィ研究』第 9 号、東洋大学、2015 年

・唐澤太輔、『南方熊楠の見た夢—パサージュに立つ者—』、勉誠出版、2014 年

・近藤俊文、『天才の誕生—あるいは南方熊楠の人間学—』、岩波書店、1996 年

・扇谷明「南方熊楠のてんかん：病跡学的研究」、『精神神経学雑誌』第 108 巻第 2 号、2006 年

・中沢新一、『芸術人類学』、みすず書房、2006 年

・夏目金之助、「思い出す事など」、『漱石全集』、第 12 巻、岩波書店、1994 年

・Myers, Frederick William Henry, *Human Personality and Its Survival of Bodily Death part 1 & 2*, Kessinger Pub Co, 1903

・箕作元八、「奇怪不思議ノ研究」、『東洋学芸雑誌』、第 42 号、東洋学芸社、1885 年

・南方熊楠、「1904 年 6 月 21 日付土宜法龍宛書簡」、武内善信（資料紹介）『和歌山市立博物館研究紀要』第 25 号、和歌山市立博物館、2010 年

・南方熊楠、三田村玄龍、「南方熊楠・三田村玄龍往復書簡」（『全集』未収録）、雲藤等・原田健一編、『熊楠研究』第 6 号、南方熊楠資料研究会、2004 年

・Murai T, Hanakawa T, Sengoku A et al. 'Temporal lobe epilepsy in a genius of natural history: MRI volumetric study of postmortem brain'. *Neurology*; 50: 1373-1376, 1998.

・Olaf Blanke, Stéphanie Ortigue, Theodor Landis, Margitta Seeck, 'Stimulating illusory own-body perceptions—The part of the brain that can induce out-of-body experiences has been located—'. *Nature* September 19, 2002